名人團平は初代か二代か

「清水町の師匠」の名によつて呼ばれてゐる、淨るり三味線の名人豐澤團平は、團平名の初代か二代かゝ疑問である。

竹本叶太夫氏編纂の「此君帳」の團平の條りには、弘化元年「二代目豐澤廣助師一時改名せられたる豐澤團平名跡を相續す」として清水町の團平を二代目と數へてゐる。

加古家の過去帳によると清水町の團平は「初代團平」となつてゐる。——加古家といふのは、清水町の團平の遺族である。清水町團平は「加古仁兵衞」がその本名である。

これらに思惑うて私は、清水町の團平を初代とも二代ともせずに、「名人團平」或は「清水町の團平」を以て呼んで來た。然る處この五月(昭和五年)發行の南江二郎氏の'MARIONNETTE'誌上に「人形芝居の臺帳としての近松の淨るり」の一文を寄せた。その內に不圖不用意に「初代團平」云々と記した。これに對して一二の方々から「清水町の團平は初代にあらず」といふ懇書を寄せられた。

實をいふと、私は加古家の過去帳に準據して初代といつていゝのではあるまいかと思うて、この私の

取調べを、目下執筆中の「近世人形淨るり史」に詳記して然る後、「初代」の文字を使はうかと思ひ、これが發表されざる以前は初代とも二代とも書かぬ、又云はぬ心得でゐたところ、不用意に「マリオネット」誌上に初代と書いてしまつたので清水町團平を茲に初代といふか二代目といふかの私の取調べの意を茲に致さねばならぬ事に立至つた。

「此君帳」が清水町團平を二代と斷ずる出所は、恐らく「淨るり大系圖」卷の十八の二代豐澤廣助條りに

豐澤團平と改め是は暫しの間にて……

の記事に據つたものと思ふ。

然らば二代廣助が、「豐澤團平」であつた時代はどれほどであるかと取調べるに、二代廣助は、文化三丙寅年九月九日道頓堀大西の芝居から吉松で三味線彈として出てゐるのであるが、この時は番付面に名はない。文化五戊辰年九月二十七日の御靈芝居から番付面に、吉松の名が現はれたのである。後、豐澤言平となり、「言」を「權」に後に改めたが、番付面に見ゆる權平は、文化八年七月の道頓堀大西の芝居である。

越えて文化九壬申年正月稻荷の芝居で初めて「豐澤團平」の名が番付面にある。そしてこの年の六月

二十五日稲荷芝居が、團平名の番付にある名殘りで、八月朔日の稲荷で、再び言平となり、文化九年九月稲荷芝居で「權平改め豐澤仙左衞門」になつてゐる。この仙左衞門が、初代廣助の歿後、文政八年正月二代目「廣助」を襲名してゐる。

即ち二代目廣助が、文化九年正月から同七月まで「豐澤團平」を名乘つてゐた勘定になる。これが初代で、清水町の團平はこの二代廣助の團平名を貰つたのであるから二代目團平となるわけである。

ところで、清水町の團平を、取調べてみると、三代廣助の弟子であつたが、二代廣助の寵を蒙つてゐた逸事が澤山傳つてゐる。そして初めの藝名は豐澤力松で、天保十年因講に加入してゐる。越えて天保十三年正月丑之助と改め、弘化元年豐澤團平を襲名してゐる。

そして加古家の過去帳では、初代團平であり、加古家にては、團平の遺志を以て、弟子源吉に團平歿後豐澤仙左衞門を相續せしめ、更らに二代目「團平」名は、仙左衞門一代を限り、貸與してゐる。この二代目團平名貸與の契約書の下書が保存されてゐる。それによると、明治四十年六月十五日、豐澤團七龍助、小團二、三平等立會の上、二代目團平名義を「使用候義は相續と借用との區別を明かに承諾の上師名拜借仕候事に相違無之候也」とある。この加古家の所謂二代目團平は、植畑九市の團平である。

團平名を取調べると右の如くであるから、嚴密にいふと清水町の團平は明かに、二代目團平である。

加古家では初代と思込んでゐるやうであるし、又世間でも植畑九市の團平を「二代目二代目」と呼んでゐる。

これらの點からして、不用意に、私は、初めて「初代團平」の二字を「マリオネット」誌上に用ひたのであるが、清水町の師匠が存世ならば、初代も二代もない、藝より外に興味を持たなかつた名人團平はそんな事はどうでもいゝと言つたらうと思はれるが、とにかく取調べだけを報告しておく。

（昭和五年五月十八日）